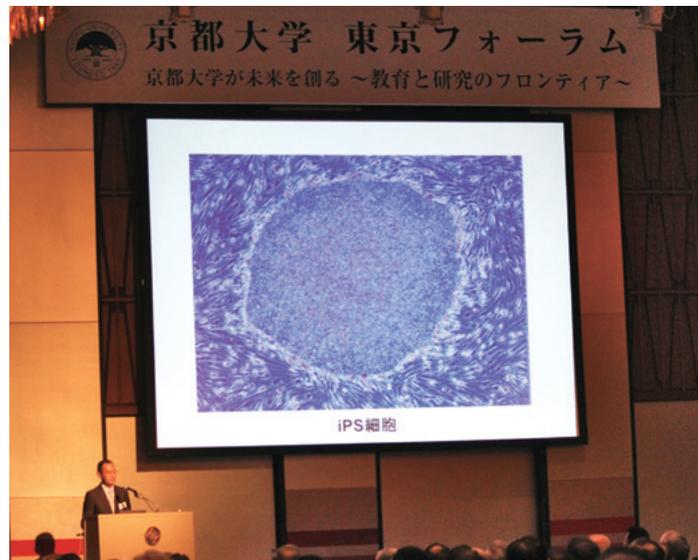




京大広報

No. 682

2012.10



京都大学東京フォーラムで講演する山中伸弥iPS細胞研究所長
—関連記事 本文3739ページ—

目次

任期の五年目を迎えて 総長 松本 紘……………3730	〈部局の動き〉 地球環境学堂と防災研究所が南太平洋大学と 部局間学術交流協定を締結……………3741 生存圏研究所がインドネシア公共事業省 人間居住研究所と部局間学術交流協定を締結 ……………3742
〈大学の動き〉 理事が発令される……………3733 経営協議会委員(学外委員)が発令される……………3734 副学長が発令される……………3735 副理事が発令される……………3735 機構長等が発令される……………3736 理事補が発令される……………3736 部局長の交替等……………3737 京都大学地域講演会(岡山講演会)を開催……………3737 全学教育シンポジウムを開催……………3738 京都大学東京フォーラムを開催……………3739 博士学位授与式を挙行……………3740 第54回京都大学未来フォーラムを開催……………3741	〈寸言〉 京大で学んでよかった 梅原 猛……………3743 〈随想〉 身近なこととサイエンスと 名誉教授 伊藤 維昭……………3744 〈洛書〉 桂キャンパスから眺める昔 神吉 紀世子……………3745 〈話題〉 松本総長が中国・蘇州で開催された中国蘇州 シンポジウムに出席……………3746

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

任期の五年目を迎えて

総長 松本 紘

総長就任以来、京都大学の理想の将来像を模索しつつ、対話を重視しながら、全学の協力のもと、伝統を基礎とし、革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を実現するための取り組みをすすめてまいりました。

1. 教育について

いうまでもなく大学の根本は教育と研究です。教育において私が基本としていることは、意志をもって勉学に励む学生を全面的に支援する大学づくりを行わなければならないということです。それには二つの側面があります。一つは学生のみなさんに期待する側面、もう一つは大学として必要とされる環境や教育内容及び制度・組織の整備の側面です。まず、学生のみなさんには京都大学においてもっと自分自身を鍛える密度の濃い時間を送っていただきたいと思えます。具体的には、学生の本分である勉学のみならず、課外活動や日々の生活も含め、志を高く持ち、それを実現できるよう己を磨き、自鍛自恃の人となっていただきたいのです。

他方、大学側の側面では、これまでの4年間、様々な形で学生支援を充実させてきました。自主財源による奨学金の拡充、西部地区等における課外活動施設の建て替え、正門付近や時計台前の整備、国際人材育成拠点棟の建設等はその例です。今後は、吉田寮および学生集会所の老朽化対策として、第二期中期目標・中期計画中の完了を目指して、新棟建築等の工程を進めると共に農学部グラウンドの人工芝化も実施します。

教育制度面では、京都大学の卒業生にふさわしい教養を涵養できる「国際高等教育院(仮称)」やグローバル時代のリーダー養成を目指す「思修館」をはじめ



とするリーディング大学院を順次整備・拡充していきます。「国際高等教育院(仮称)」に関しては、グローバル化する世界情勢、社会環境の急激な変化に対応すべく、京都大学の教養・

共通教育のあり方に関し、平成21年11月以降研究科長部会において「学士課程における教養・共通教育検討会」及び作業部会を設置して検討を開始していただき、その報告を受けて、高等教育研究開発推進機構でのカリキュラムの見直し、他方では平成23年12月の部局長会議において設置された「京都大学全学共通教育実施体制等特別委員会」での全学共通教育の実施体制の見直し作業を進めています。特に後者から「企画、調整及び実施等を一元的に所掌する全学責任組織」の必要性についての最終報告を受けて、本年6月の部局長会議において私を委員長とする「大学改革特別委員会」を設置し、現在「国際高等教育院(仮称)」立ち上げに向けて議論、調整を進めています。また、「思修館」については、全学の協力を得て、現在新たな研究科、大学院総合生存学館(思修館)を設置審に申請しています。

教育の国際化に関しては、講義の英語化を進め、多くの留学生を受け入れることを進めてきました。G30プログラムによる学部・大学院講義の英語化と留学生枠の設定を行いました。今後、より多くの講義の英語化を進めるとともに、日本人学生の国際化を加速するために、本年度から、新たな学生や職員の留学支援を行う「ジョン万プログラム」を開始します。

2. 大学入試制度改革について

教育に関連し、私はいま大学入試制度改革が必要であると切に感じています。このことは、今の入試制度が日本の「育人」に悪い影響を与えているのではないかという思いに端を発します。そして、我々大学人も入試が初等中等教育に与えている大きな影響の責任を十分に認識し、改革に踏み出すべきと考え、学力試験だけではない特色ある選抜方法の検討を始めていただいています。京都大学は、高校までに幅広い学習や様々な体験をして、自ら進んで目的を設定して、自分の意志で勉学したい人、あるいは自分で課題を発見し、チャレンジする人など能動的な学びが行なえる入学者に期待しています。高校教育と大学教育の間にある入学試験、大学が定めているアドミッション・ポリシー、それらを十分考慮したうえで、現行のような学力試験だけではない特色入試について入学試験検討タスクフォースを設置し、議論を重ね、実施に向け各学部でその内容が現在検討されています。検討状況は学部ごとに異なると思いますが、新たな方法を採用しようとする学部においては、平成25年当初に発表、平成28年度入試から特色入試の実施となります。なお、この大学入試制度改革は、従来の入試を180度急激に変えるということではなく、最初は一部の定員を使っての部分的な試行から始められると思います。時間をかけ、検証と評価を行いながら、結果として入学者選抜方式が多様化することを期待しています。そしてこの試みが、本学の教育に貢献し、ひいては日本の「育人」に関する議論に一石を投じるものになればと考えます。

3. 研究について

次に、大学のもう一つの根本である研究についてですが、私が基本としていることは、すべての教員が世界トップレベルの研究を行い、世界屈指の研究大学として胸を張れるように研究に邁進できる大学

づくりを行うということです。これにも教育と同様に二つの側面があります。一つは大学の構成員一人一人が自由の学風に恥じない創造性に溢れる京都大学の研究者として責任を果たしていただくこと、もう一つは大学として最先端の研究を支えられるような環境整備を行うということです。いま、すさまじい国際競争の中、研究者には研究に専念できる抜本的な体制作りが喫緊の課題となっています。そのため研究者が研究にできるだけ専念できるように研究支援を主たる業務とする学術研究支援室を始動させました。すでにURA (University Research Administrator) と称する専門家を採用し、研究を広く厚くサポートする体制をとっています。

また、急速に進む学術の学際化に対応するために、機動的な研究グループの離合集散を可能とするユニット制度を導入しました。そして、これをさらに発展させるために学際融合教育研究推進センターも設置しました。更に、新たな学内組織のあり方の実験ともいえるWPI(世界トップレベル研究拠点)のiCeMS(物質-細胞統合システム拠点)や世界が注目するiPS研究の拠点CiRA(iPS細胞研究所)の支援、次世代を担う先見的な研究者育成のための白眉プロジェクトの実施など様々な試みを展開しています。例えば、学際融合教育研究推進センターにおいては、現在19のユニットが本センターに所属し、純粋・基盤的な学術志向型から応用的な科学技術志向型まで、研究推進から研究者養成、大学院教育、高度専門職業人育成まで、それぞれのユニットにおいて様々な特色ある教育研究活動が展開され、魅力ある成果が出されてきています。また、既存ユニットも含め新たにいくつかのユニットの参画が準備・計画されており、さらに幅広いセンター活動が進展していくものと期待されます。また、白眉プロジェクトにおいては、平成21年度に募集を開始し、毎年20名を上限に、平成22年度から本学で白眉研究者達が研究に従

事しています。現在第4期の応募が終了し、まもなく内定者が発表されます。現在の白眉研究者のアクティビティの高さは、その受賞や外部資金の獲得状況に十分に示されているとともに、この白眉プロジェクトはすでに内外から高い評価を受けています。なお、本年度から始める「ジョン万プログラム」では本学の若手研究者が海外留学しやすくなるように所属する研究室を財政的に支援することも始めます。

4. 財務体質の改善について

危機的な国家財政の下、各種事業の推進には法人全体の財務体質の強化が何にもまして必要です。教員のみなさんには全員参加で競争的資金を獲得していただく必要があります。大学としては、産官学連携の加速化と渉外活動の充実を一層図っていきます。産官学連携に関しては、これまで産官学連携本部を設立し、産官学連携欧州事務所を中心とした国際産学連携ネットワークの構築およびそれを基盤とした産学連携に関する先端情報獲得、情報発信、知財の活用、CK(京都大学キャノン協働研究)プロジェクト、AK(京都大学アステラス創薬)プロジェクトに代表される京大産学連携プロジェクトにおける契約・知財業務に関するサポート等をすすめてきました。

渉外活動としては、渉外部の立ち上げ、同窓会組織の強化、東京フォーラム、アエラ編集部との協働による『京都大学 by AERA: 知の大山脈、京大。』の

発刊等により、本学のプレゼンスを高め、寄付文化を育てるということに取り組み始めました。

併せて、附属病院は医学研究の推進や人々の健康増進への貢献のみならず、大学運営の観点からも極めて重要であり、病院長と理事を兼務いただく体制としました。これらの活動を基礎に、収入の一層の多角化を図りながら、健全な財務体質に向け努力したいと思います。なお、私自身の対外活動の一端は大学ホームページの総長Voiceでご覧いただけます。ぜひご覧いただきご意見やアドバイスをいただくと幸甚です。

5. むすびに

最後になりましたが、人材こそが大学の最も大きな資産であり、現在のみならず将来の京都大学を担う優秀な教員、職員を確保、育成すること、ならびにこれら教職員を今以上に大切にする雰囲気醸成することが最も重要であると認識しています。その上で、大学の構成員がそれぞれの立場で最高のパフォーマンスをあげ、大学全体のパフォーマンスが一層上がるようにして欲しいと強く願っています。京都大学の構成員すべてが「己自身が京都大学そのもの」という気概を持って、世界最先端の総合研究大学として研究成果を更に積み上げるとともに、高い研究レベルに裏打ちされた情熱溢れる教育に打ち込み、先見性をもったリーダーを続々と世界に輩出していこうではありませんか。

大学の動き

理事が発令される

現理事の任期満了に伴い、10月1日付けで理事が任命された。任期は平成26年9月30日まで。

◆理事



学生・図書館担当
(副学長)
赤松 明彦 (再任)



教育担当
(副学長)
淡路 敏之 (再任)



総務・企画・情報環境担当
(副学長)
江崎 信芳 (再任)



渉外・産官学連携担当
(副学長)
小寺 秀俊 (新任)



財務・施設・環境安全保健担当
(副学長)
西阪 昇 (再任)



病院・国際担当
(副学長)
三嶋 理晃 (新任)



研究担当
(副学長)
吉川 潔 (再任)

経営協議会委員（学外委員）が発令される

現経営協議会委員の任期満了に伴い、10月1日付けで経営協議会委員が任命された。任期は平成26年9月30日まで。



有本 建男（再任）
政策研究大学院大学 教授
（独）科学技術振興機構
社会技術研究開発センター長



安西祐一郎（新任）
（独）日本学術振興会 理事長
（学）慶應義塾 学事顧問



大竹 伸一（新任）
西日本電信電話（株）
取締役相談役



葛西 敬之（新任）
東海旅客鉄道（株）
代表取締役会長



門川 大作（再任）
京都市長



北 徹（再任）
神戸市立医療センター
中央市民病院長



小松 弥生（新任）
（独）国立美術館
理事 兼 事務局長



土岐 憲三（再任）
立命館大学教授



福島 伸一（再任）
新関西国際空港（株）
代表取締役会長



ふごの
畚野 信義（再任）
（株）国際電気通信基礎技術研究所
相談役



堀場 雅夫（再任）
（株）堀場製作所
最高顧問



森 雅彦（再任）
（株）森精機製作所
取締役社長



山田 啓二（再任）
京都府知事

副学長が発令される

10月1日付けで副学長が任命された。任期は平成26年9月30日まで。



法務・コンプライアンス担当
林 信夫（新任）

副理事が発令される

現副理事の任期満了に伴い、10月1日付けで副理事が指名された。任期は平成26年9月30日まで。



桂キャンパス担当
北野 正雄（再任）



宇治・遠隔地キャンパス担当
津田 敏隆（新任）



事務総括担当
浅野 敦行（新任）

機構長等が発令される

現機構長等の任期満了に伴い、10月1日付けで機構長等が指名された。

◆高等教育研究開発推進機構長 ◆環境安全保健機構長



林 信夫 (再任)
任期：平成 25 年 3 月 31 日まで



大寫 幸一郎 (再任)
任期：平成 26 年 9 月 30 日まで

◆国際交流推進機構長



森 純一 (再任)
任期：平成 26 年 9 月 30 日まで

◆情報環境機構長



美濃 導彦 (再任)
任期：平成 26 年 9 月 30 日まで

◆図書館機構長



引原 隆士 (新任)
任期：平成 26 年 9 月 30 日まで

◆産官学連携本部長



小寺 秀俊 (新任)
任期：平成 26 年 9 月 30 日まで

理事補が発令される

現理事補の任期満了に伴い、10月1日付けで理事補が任命された。

学生担当	間藤 徹	農学研究科教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで
学生担当	勝見 武	地球環境学堂教授	(新任)	任期：平成26年 9 月30日まで
教育担当	高見 茂	教育学研究科教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで
教育担当	森脇 淳	理学研究科教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで
教育担当	中村 佳正	情報学研究科教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで
総務・企画担当	潮見 佳男	法学研究科教授	(新任)	任期：平成26年 9 月30日まで
総務・企画担当	大志万 直人	防災研究所教授	(新任)	任期：平成26年 9 月30日まで
総務・企画担当(リスクマネジメント担当)	洲崎 博史	法学研究科教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで
渉外担当	阿辻 哲次	人間・環境学研究科教授	(再任)	任期：平成25年 3 月31日まで
渉外担当	藤井 聡	工学研究科教授	(新任)	任期：平成26年 9 月30日まで
財務・施設担当	川北 英隆	経営管理研究部教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで
財務・施設担当	寶 馨	防災研究所教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで
病院担当	武藤 誠	医学研究科教授	(新任)	任期：平成25年 3 月31日まで
研究担当	川上 浩司	医学研究科教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで
研究担当	榎木 哲夫	工学研究科教授	(再任)	任期：平成26年 9 月30日まで

部局長の交替等

(新任)

附属図書館長

引原隆士工学研究科教授(先端電気システム論講座担当(非線形力学・パワーエレクトロニクス))が、林 信夫附属図書館長の後任として、10月1日付けで選出された。任期は平成26年9月30日まで。



白眉センター長

田中耕司研究国際部特定専門業務職員(東南アジア地域研究(熱帯環境利用論))が、伏木 亨白眉センター長の後任として、10月1日付けで選出された。任期は平成26年9月30日まで。



(再任)

医学研究科長・医学部長

湊 長博医学研究科教授(医学専攻感染・免疫学講座担当(免疫学))が、10月1日付けで医学研究科長に再任された。任期は平成25年9月30日まで。

京都大学地域講演会(岡山講演会)を開催

地域講演会は、京都大学がこれまで蓄積してきた知的財産や現在進行中の教育研究活動の成果等を全国に紹介し、広く社会に還元することを目的として平成9年から開催しているものである。

今年度第1回目として、9月1日(土)、岡山市において理学研究科附属天文台長の柴田一成教授が「爆発だらけの宇宙と太陽 - 我々はなぜ生まれたのか?」と題した講演を行った。当日は会場が満員となる約400名の



講演をする柴田教授

参加があった。中高生を含む多くの若い参加者から、活発な質疑もあり、盛況のうちに閉会した。



会場の様子

(渉外部)

全学教育シンポジウムを開催

9月12日(水)、第16回京都大学全学教育シンポジウム「これからの共通・教養教育」を、教職員247名の参加のもと、京都大学桂キャンパス「船井哲良記念講堂」で開催した。

このシンポジウムは、参加者が教育について全学的な議論や意見を交わすことにより共通理解を深め、今後の教育の改善・充実に資するとともに、部局の枠を越えた教職員の交流の場となることを目指して、平成8年から開催されており、今回で第16回目となる。今回も昨年と同様に全体会のみとし、一つの話題を全員が共有できるような構成とした。

午前の部は、松本 紘総長による「京都大学の考える教養教育」と題した基調講演の後、(1)磯 祐介情報学研究科教授による「共通・教養教育企画・改善小委員会の報告」、(2)木南 敦法学研究科教授による「高校の学習指導要領と入試制度」、(3)飯吉 透高等教育研究開発推進センター教授による「学業・成績評価の国際標準と通用性」の3つの報告があり、現在の京都大学の共通・教養教育の状況と高大接続の観点で、問題の共有と意見交換を行った。

午後の部は、「グローバルキャリアの中での語学力と教養力」というテーマでパネルディスカッションを行った。コーディネーターは多賀 茂高等教育研究開発推進機構副機構長が務め、学内からパネリストとして、横山 美夏法学研究科教授、



松本総長による基調講演

武藤 誠医学研究科教授、長谷部 伸治工学研究科教授、河合 江理子高等教育研究開発推進機構教授、池田 聖子同教授らが報告を行った。その後、外部からコメンテーターとして、大久保 亮日本生命保険調査部国際渉外部長及び井上 久美株式会社ヒア&ナウ 代表取締役社長に参加いただき、それぞれ国際金融機関、国際会議の同時通訳業務で活躍されている立場から貴重な話を伺った。

午前の部・午後の部を通し、京都大学の共通・教養教育に関する活発な意見交換が行われ、本シンポジウムは盛会のうちに終了した。なお、本シンポジウムの詳細については、報告書を作成する予定なのでそちらをご覧いただきたい。



パネルディスカッションの様子

(学務部)

京都大学東京フォーラムを開催

「京都大学が未来を創る～教育と研究のフロンティア～」をテーマに、京都大学東京フォーラムを9月21日(金)、ホテルニューオータニで開催した。出席者は約320名で、学外からは本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等に多く参加いただき、学内からは松本 紘 総長をはじめ、理事・副学長、副理事、部局長等が出席した。



松本総長の講演

本フォーラムでは、松本総長から「次なる社会と人材育成～京都大学の取り組み紹介を添えて～」と題して、新しい社会のビジョンと、本学の教育改革や人材育成の取り組みについて、続いて山中伸弥 iPS細胞研究所長から「iPS細胞研究の進展」と題して、それぞれ講演があった。

講演会終了後に実施した懇親会では、川端達夫 総務大臣、和田紀夫 日本電信電話株式会社相談役、



山中所長の講演



川端大臣の懇親会挨拶

森口泰孝 文部科学事務次官、大西 隆 日本学術会議会長からそれぞれ挨拶があった。

また、今回の東京フォーラムの開催に先行して、同日に、昨年の東京フォーラムにて設立が発表された、経済界で活躍する卒業生が結束して総長を応援しようという集まりである「京都大学鼎会」の第1回総会が61名の出席者を得て開催され、松本総長が出席して講演を行った。

本フォーラムは今回で7回目を迎えたが、昨年度からは首都圏における本学の情報発信という目的に留まらず、出席いただいた各界で活躍される本学関係者の結束を図ることを目的としており、今年昨年度以上の参加者を得ることができた。本学では、このような機会を継続的に提供することで、首都圏でのプレゼンス向上に努めていきたいと考えている。



和田相談役の懇親会挨拶

(渉外部)

博士学位授与式を挙

9月24日(月)午前10時30分から、百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、松本 紘総長，理事・副学長をはじめ，各研究科長・学舎長，理事補出席のもと，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各授与者に対し学位記(平成24年5月23日付，7月23日付，9月24日付)が手渡された後，総長の式辞があり，午前11時45分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。総長式辞は総長室ホームページに掲載している。

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/intro/president25/speech/2012/120924_1.htm



松本総長による学位記の授与

学 位	平成24年5月			平成24年7月			平成24年9月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	1	-	1	3	1	4	1	-	1
博士(教育学)	3	-	3	2	-	2	1	-	1
博士(法学)	-	-	0	-	-	0	2	-	2
博士(経済学)	4	1	5	2	3	5	2	2	4
博士(理学)	11	1	12	4	-	4	2	-	2
博士(医学)	10	6	16	9	4	13	7	2	9
博士(医科学)	3	-	3	-	-	0	-	-	0
博士(社会健康医学)	-	-	0	-	-	0	-	-	0
博士(人間健康科学)	-	-	0	-	-	0	-	-	0
博士(薬学)	-	-	0	-	1	1	-	-	0
博士(薬科学)	-	-	0	-	-	0	-	-	0
博士(工学)	5	2	7	4	-	4	37	2	39
博士(農学)	10	-	10	1	-	1	2	1	3
博士(人間・環境学)	1	-	1	1	-	1	7	-	7
博士(エネルギー科学)	1	-	1	-	-	0	10	-	10
博士(地域研究)	-	-	0	1	-	1	-	-	0
博士(情報学)	2	-	2	1	-	1	9	-	9
博士(生命科学)	3	-	3	2	-	2	4	-	4
博士(地球環境学)	1	-	1	-	-	0	5	-	5
計	55	10	65	30	9	39	89	7	96



(学務部)

第54回京都大学未来フォーラムを開催

9月26日(水)、百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、第54回京都大学未来フォーラムを開催した。

今回の京都大学未来フォーラムは、本学経済学部卒業生で作家の貴志祐介氏を講師に迎えて開催した。

貴志氏は、現在のエンターテインメントにおいて残酷な表現は、作り手の立場からすると読者や視聴者を引きつけるために必須となっているが、これらを規制する昨今の条例改正などに見られる動きは、表現の自由に対する脅威となるとともに、結果として想像力や共感力の乏しい人間を大量に生み出すことに繋がり、かえって残酷行為が蔓延する社会を招来することとなるおそれがあるとの意見を述べられた。

参加者からは、「取りあげにくいテーマについて

の講演で非常に面白かった。」「第一線で活躍されている方の考えを直接うかがえてよかった。」「小説を読む時にさらに考えを深めることができると思う。」などの感想が寄せられた。



講演をする貴志祐介氏

(渉外部)

部局の動き

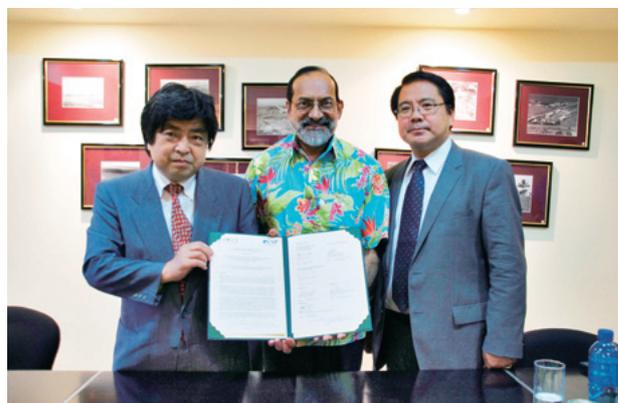
地球環境学堂と防災研究所が南太平洋大学と部局間学術交流協定を締結

地球環境学堂と防災研究所は、9月7日(金)、南太平洋大学(USP)の本部(フィジー・スバ市)にて学術交流協定調印式を行った。Neef Andreas 地球環境学堂特定教授、寶 馨 防災研究所教授、Jaindra Karan 南太平洋大学総長補佐の立会いのもと、藤井滋穂 地球環境学堂長とRajesh Chandra 南太平洋大学総長が、協定書に署名した。調印式には他に、小林広英 地球環境学堂准教授、藤枝絢子 地球環境学堂特定助教、井上 園 GCOE-ARS事務室長、USPからSushil Kumar 理工環境学部副学部長、Joeli Veitayaki 海洋学科長らが列席した。

南太平洋大学は1968年に設立され、太平洋地域の12か国の政府の拠出によって運営される地域大学であり、3つのキャンパス(フィジー、サモア、バヌアツ)と11の地域キャンパスを有する太平洋地域の高等教育・研究の中心となっている。特に、太平洋地域が直面する気候変動、環境と開発、資源管理な

どの環境問題の解決を目指した教育、研究を活発に行っており、今後の教育研究連携が期待される。

本年度は9月4日より南太平洋大学の現地指導員のもと、地球環境学舎修士1回生4名がインターン研修、ミニプロジェクトワークを実施している。



左から藤井地球環境学堂長、Chandra南太平洋大学総長、寶教授

(地球環境学堂・防災研究所)

生存圏研究所がインドネシア公共事業省人間居住研究所と部局間学術交流協定を締結

生存圏研究所(Research Institute for Sustainable Humanosphere; RISH)と、インドネシア公共事業省人間居住研究所(Research Institute for Human Settlement; RIHS)は、8月28日(火)部局間学術交流協定を締結した。調印式は、インドネシア公共事業省人間居住研究所で行われた。

調印に先立ってセミナーが実施され、双方から4名の研究者による現在の研究内容の紹介が行われ、相互理解を深めた後、津田敏隆 生存圏研究所長と Anita Firmanti 人間居住研究所長が協定書に署名した。また、セミナーの後、人間居住研究所内で生存圏研究所との共同研究などで利用する可能性のある施設の見学を行った。

人間居住研究所との交流は、生存圏研究所において1996年から10年間実施していた日本学術振興会拠点大学交流事業(拠点校プログラム)「木質科学」(熱帯森林資源の持続的な活用のための技術開発)での協力から始まった。

また、Firmanti所長は、生存圏研究所にて2000～2005年度の日本学術振興会「論文博士号取得希望者

に対する支援事業」によって博士号を取得されており、現在ではMaryoko Hadi 研究員が2008年度より同事業での研究を進めており、継続した交流を行っている。

加えて、東南アジア研究所と合同で行っている特別経費プロジェクト「ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開－東アジア共同体構想を支える理念と人的ネットワークの強化－」「バイオマス社会研究」のプロジェクト「熱帯材を用いたローコストハウスの建築技術の開発」において、より深い研究交流を行うようになり、ミニワークショップの開催など様々な交流を重ねている。これらの実績を踏まえて、このたびの協定の締結に至った。

両機関は、今回の交流協定の調印により、さらに強い協力関係を築いていくことになる。新たな共同研究やシンポジウムの実施、人物交流等を通して、学術研究の推進と教育活動の強化を図っていく予定である。



Firmanti所長(左)と津田所長(右)



両研究所紹介の様子

(生存圏研究所)

寸言

京大で学んでよかった

梅原 猛



私が京都大学に入学したのは終戦の年、昭和20(1945)年4月である。日本は激しい空襲にさらされていたため入試がなく、願書だけで合格が決定された。私を赤子のときから育ててくれた養父は、私が東大法学部に入ることを強く望んでいたが、私は尊敬する西田幾多郎の学風の残る京大文学部哲学科で学びたいと思い、「ひとときの栄華を図るなら東大、千年の真理を求めると京大」と豪語して、京大へ願書を出し、入学した。

私が入学したとき、京大には西田幾多郎や田辺元のような独創的な哲学者はいず、もっぱら西洋哲学を研究しようという学風が哲学科を支配していた。西田や田辺の哲学を継承しようという学者もいたが、それらの学者にしても、西田や田辺の如く東西の思想を総合して独創的な哲学体系をつくるのではなく、西田や田辺の思想を矮小化して伝えようとする学風であった。私はいずれの学風にも親しめず、三年間の学生、そして後継者養成制度である五年間の大学院特別研究生を終えたが、やはり京都哲学界の異端児であったといつてよい。

その後、私は仏教や芸術や歴史の研究に打ち込み、四十代の後半、憑かれたように『神々の流竄』(古事記・日本書紀論)『隠された十字架—法隆寺論』『水底の歌—柿本人麿論』を立て続けに書いた。これらはいずれもベストセラーになり、「梅原日本学」という名称さえ生まれた。それらの著書は、それまでふつう日本文学研究者や日本歴史学者によって研究されてきた日本のすぐれた文化遺産である『古事記』『日本書紀』、法隆寺及び柿本人麿を哲学者の目で論じたものである。哲学的思惟というのはソクラテスやデカルトの目で世界をみることであるが、そのためには何よりも、それまで信じられてきた通説を疑わねばならない。

たとえば『万葉集』において、「柿本人麿死す」と記されているのをもとに、律令において、三位以上の人の死には「薨」、四位と五位には「卒」、六位以下には「死」と記すと規定されているので、人麻呂は六位以下の下級役人であったとする契沖、賀茂真淵の説を疑う人は誰もいず、その説が真理としてまかり通っていた。

しかし『古今和歌集』の「仮名序」には人麻呂が「おほきみつのくらゐ」すなわち正三位と記され、また「真名序」には「柿本大夫」と記され、人麻呂は五位以上であることが明らかである。生前正二位であった長屋王も、罪人になったために官位が剥奪され、「死す」と記されているのである。人麻呂については中世以来、流罪説が暗に語られているが、学界は国学の伝統に従い、国学者にとって聖人であった契沖、真淵の説を疑おうとしなかった。

日本についての新しい学問の形成において、京都に住んでいることは甚だ有利であった。京都からは多くの歴史的遺跡、由緒ある地に短時間で到達でき、詳しいフィールド調査が可能であるからである。歴史の研究においてはただ文献研究のみではなく、その歴史が営まれた地を詳しく調査する必要がある。私は京都に住んでいるおかげで多くの遺跡に容易に行くことができた。

もう一つありがたいことがあった。京大には専門分野を超えたすぐれた学者同士の交友関係が築かれていた。私の場合、湯川秀樹、貝塚茂樹、吉川幸次郎、今西錦司などの諸先生方が、孤立無援の感のあった私を認めてくださったのである。

私の生き方はおそらく京大で学んだおかげで可能になったのであろうが、いわゆる京大の大学者、西田幾多郎、河上肇、内藤湖南などは私のように自由な生き方をしたのではなからうか。そのような学者ばかりか、創造性に富む自由な政治家や実業家などを京大は数多く生んだのではないか。その伝統は決して失われてはならない。今後もそのような人間が京大から続々と生まれることを期待したい。

(うめはら たけし 国際日本文化研究センター顧問 昭和23年文学部卒業)

随想

身近なこととサイエンスと

名誉教授 伊藤 維昭

2007年にウイルス研究所を定年退職し、2009年度から京都産業大学に勤めている。京大時代、学部の講義を少ししか担当しなかったついても回ったのか、学生にわかってもらえる講義をするのに四苦八苦している。学ぶことも多く、想定外のことも起こる。トップクラスの成績で理解力抜群の学生が質問に来た。よい質問で、わかりやすく説明したつもりだが、学生は納得できない様子で、「先生、でも、大腸菌にはタンパク質なんて無いのでしょうか?」と、思い悩んでいた中心問題(?)に関する爆弾発言をした。講義の中で、生命現象の仕組みと原理を解き明かす学問である分子生物学は、大腸菌や大腸菌に感染するウイルス(バクテリオファージ)の研究から生まれたという歴史的経緯はもちろん、「翻訳」と呼ばれる遺伝暗号解読によるタンパク質合成の話もしたつもりなので不思議である。この学生にとって、生物とは身近に生きていることが認識できる動物・植物のことではあっても、目に見えない大腸菌が我々と共通性の高い仕組みで生きているという概念はなかったのかもしれない。タンパク質、遺伝子などの言葉も問題である。これらは日常用語と学術用語で指し示す内容にずれがあり、ややこしさの一因となっているかもしれない。彼女は、「大腸菌には肉がないではないか」と思ったのかもしれない?

大学人は社会に理解されるべく自分たちの研究を発信しなければならない。その時、なるべく身近な言葉で身近な現象と結びつけて説明することは重要である。一方で、物事の最も重要なことは、目に見えない、我々の感覚では直接には感じるができない(身近ではない)ところにあることこそ、何とかして理解してもらう必要があるのではないだろうか? 単語も注意深く使うべきだろう。「何々病の遺伝子発見」と言った新聞記事を見かけるが、多くの場



合「遺伝子の異常が病気を起こす」という伝え方をすべきだろうと専門外ながら思ったりする。大腸菌が生きていることも、我々が生きていることも、細胞の中の目には見えないDNA・RNA・タンパク質系の働きによること、何千〜何万種類のタンパク質が遺伝子の指令で作られて働いていること、——このような、学者には自明だが、一般の人々には伝わっていないかもしれないことこそ、丁寧に説明してもらってほしいものである。

そう言った知識は実際にも役立つだろう。新聞の全面広告に「酵素」がよく載る。酵素が生物に必須であるとの説明は全く同感である。しかし、重要だからサプリメントとして食べましようと言うのはナンセンスである。消化酵素など、「体の内部」ではあっても、「細胞の外」で働くものは経口摂取に少しは意味があるのかもしれない。しかし、細胞の中で生命活動を支えている何千、何万種類の酵素(≒タンパク質)は、重要であるからこそ、自分の遺伝子を設計図としてつくり出すのが生命の摂理であり、生物の自己同一性の源でもある。核酸(DNA, RNA)ですらサプリメントとして発売されていることには驚く。我々は生体物質を食べると、素材(ヌクレオシド、アミノ酸)にまで分解し、自らの遺伝情報によって自分の核酸、タンパク質として組み立て直すのであり、食べたものが細胞の中に入ってそのまま働くことはない。酵素の広告には学者らしい人も関わっているようだが、不思議な話である。

さて、こちらの新学部は研究にも力を入れる方針で、私も研究を続けている。遺伝暗号を解読しつつアミノ酸を繋げてタンパク質を作っていく過程は、一定スピードの機械的なものではなく緩急の制御があることを調べている。以下の「身近な」例え話はどうだろうか? ——話の上手な人は、決して一定スピードで話すのではなく、緩急をつけポーズもおく・・・細胞内の微細なタンパク質合成の現場でも同様のことが行われているようである。

(いとう これあき 平成19年退職 元ウイルス研究所教授、専門は分子生物学・細胞生物学 現京都産業大学総合生命科学部教授)

洛書

桂キャンパスから眺める昔

神吉 紀世子

私の専門分野は都市計画・農村計画で、様々な事例地の地域づくりの取り組みのなかで、歴史的環境を保全管理するための計画をつくる仕事によく従事する。そうした仕事では、史実に基づいた由来がわかる事物等だけでなく、史実とは確認できないが地域に根付いている由緒話に基づいて関係者により形成されている環境も、保全の対象として見出されることがしばしばある。後者では、由緒の確かさは不明瞭で評価が難しい場合でも、環境に対する一定の作法が地域社会に重視されている事実や形成されている環境自体が高く評価され、地域づくりとして重要な要素になることがある。例えば「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録の際、史料に記録され現地確認もできる事物等が主として遺産を構成することになったが、各地の伝承や人々が史料から展開した考察をもとに積極的に守っている風景地等も地域づくり上、重要な要素として見出されたのだった。由緒に確かさが不足しても、人々による考察の展開や行動は歴史的経過と現在環境をつなぐ重要な営みとなる可能性が十分にある。

今回、この執筆機会を戴き、桂キャンパスのある丘陵地の歴史的環境に目をむけてみる気になった。実は、ここ4年程、桂キャンパスと隣接する桂坂地区のまちづくりに参加していることもあって、桂坂の中心部にある「大枝山古墳群」のことをよく見知る機会を得たことがもう1つのきっかけである。一昨年の秋に桂坂の住民の方々自らの主催で「第2回桂坂まち歩き」という催しが開催され、その主たる開催地が大枝山古墳群であった。200名以上の参加がある盛況な催しに研究室の院生諸氏もファシリテーター等の役目で参加し奮闘したのだが、このときに解説を担当された考古学者のM先生が古墳群の立地の議論の一端をも紹介して下さった。古墳群は秦氏あるいは土師氏にゆかりのあるこの地域の有力者の



ものとみられるようで、立地が選ばれた理由として、丹波と京都・乙訓の間の交通ルートに近いこと、当時の都がある奈良方面への眺望が丘陵地から得られること等、いくつかの説があるとのことである。古墳に関する考古学的知見をたいへん興味深く伺ったのだが、立地の議論として紹介された眺望に関する説も非常に印象的だった。

古墳時代の人々が実際に何を眺めていたか根拠をもって示すことはおそらく難しい。一方、遠くを眺めるという行為は我々も日頃行っているので、古墳時代の人々の視線を具体的にイメージできると、千年以上昔の人々がこの地に居たことをより具体的に捉えることができ、眺望が得やすいというこの丘陵地のもつ特徴に、歴史的環境に通じる意味を見出せそうである。

そこで今夏。今夏は急な大雨が毎日のように降った時期があったが、桂キャンパスからの石清水八幡宮のある男山方面への広い眺望の中に局地的な降雨が頻繁に視認でき、はからずも古墳時代の人々の視線をいま少し具体化する想像を巡らせた。男山のあたりは古墳時代にも重要な交通路だったであろうから、当時の有力者も局地的降雨を見れば「雨は大丈夫か、あたりの往来は問題なさそうか」と心配して目をこらしたのではないか。その視線は現代の我々とも通じる。まして、秦氏や土師氏は土地開発に秀でた集団とされるのだから天候やその影響を熟知していたであろう。眺望について、見渡せる視対象の範囲だけでなく、局地的天候と地勢があわせて視認できることまで着目すると、見えている雨の景が、古墳時代に通じる千年余の景とみる解釈は、証拠は示せないがそれなりに成り立ちそうな、ある種の由緒話だと思えたのだった。

大枝山古墳群とその緑地については、入念な準備を経て今年5月に「桂坂古墳の森保存会」が設立され見学できる機会が増えた。古墳の実物と、想像が混じる眺望の由緒話とにふれ、この現代的な街とキャンパスの丘陵地にも、歴史的環境を実感をもって見出すことができそうである。

(かんき きよこ 工学研究科教授、専門は都市計画・農村計画)

話題

松本総長が中国・蘇州で開催された中国蘇州シンポジウムに出席

9月6日(木)中国蘇州市にて、「神戸大学・京都大学・大阪大学・復旦大学・上海交通大学・蘇州大学・同濟大学・浙江大学 中国蘇州シンポジウムー日中国交正常化40周年ー」が株式会社池田泉州ホールディングス池田泉州銀行の主催により開催され、本学から松本 紘 総長、田中宏明 工学研究科教授、岡本誠一郎 工学研究科特定准教授、研究国際部職員が出席した。

このシンポジウムは、2010年6月11日、関西から日本を元気づけようという目的で京都大学、神戸大学、大阪大学の学長が集まり開催された「関西活性化シンポジウム」を発端としたものである。日中国交正常化40周年の節目を迎える記念として、多くの関西企業が進出している中国蘇州市を開催地に、中国において関西地域に相当する華東地域の主要大学である復旦大学、上海交通大学、蘇州大学、同濟大学、浙江大学の5大学の学長を迎え、開催する運びとなった。

シンポジウムの前半は、世界中が抱えている喫緊の課題である環境問題をテーマに「グリーンイノベーション」と題した講演会が開催され、8大学から各大学を代表する研究者が講演を行った。本学からは、田中教授が「持続可能な都市水環境を作るための再生水技術」について講演した。研究者だけでなく、日中の企業などから計130名の参加者が集まり、熱い議論を繰り広げ、交流を深めた。

シンポジウムの後半は、8大学の学長による「グローバル人材育成に向けた国際化戦略」をテーマとした講演が行われ、約260名が参加した。松本総長の講演では、全世界が共通で抱えている資源問題、環境問題、感染症など複合化した課題を解決できるグローバルリーダーの育成が必要であるとし、グローバル人材に必要な要素とは、将来を見通せる能力、確固たる世界観や哲学・志、幅広い視野、国際社会で発言できる外国語能力、日本人・中国人としての自覚であり、グローバル人材の育成とは、「育人」であると述べ、本学のグローバル人材育成の取り組みである博士課程教育リーディングプログラム京都大学大学院「思修館」を紹介した。

8名の学長による講演の後、企業代表者として服部盛隆 株式会社池田泉州銀行相談役および北山隆一 株式会社日立製作所執行役常務を交えたパネルディスカッションが行われ、それぞれの大学が考えるグローバル人材や企業が求める人材、その育成方法について意見交換がなされた。

松本総長は、閉会の辞で、蘇州にて千三百年前に詠まれた唐詩「楓橋夜泊」を詠みあげ、詩の背景を紹介しながら、問題の本質を見抜く力は、学習、思索、実践の三段階を経て修得できるとし、国を超え、産・官・学が一体となった育人が必要であると述べ、シンポジウムを締めくくった。



田中教授による講演



パネルディスカッションの様子

(研究国際部)